

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

# RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c\_rcc/ TEL:0798-54-6019

## 研究プロジェクト報告

### 研究プロジェクト

### クリスチャン・シオニズムに関する思想的探究

#### 〔公開研究会報告〕

#### 米国プロテスタントイイズムとシオニズム

#### —ひとつのターニングポイント

講師：立教大学 文学部 教授 加藤 喜之氏

「クリスチャンシオニズムに関する思想的探究」プロジェクトは、クリスチャン・シオニズムの起源と進展の経緯を、聖書学、神学、哲学によって明らかにし、今日のイスラエル・パレスチナ問題に対して学術的観点から提言をすることを目指している。今回講演を依頼した加藤喜之教授（立教大学）は、元々一七世紀の神学・哲学の専門家だが、より広範な政治と宗教への関心に基づきクリスト教福音派と米國政治の関係についてまとめられ、昨年『福音派：終末論に引き裂かれるアメリカ社会』（中公新書、二〇二五年）を上梓された。

米國の福音派は、ほかでもない今日のクリスチャン・シオニズムの中心的な担い手である。公開研究会では、本書の内容をふまえつつ、プロジェクトの趣旨に合わせ「米國プロテスタントイイズムとシオニズム…ひとつのターニングポイント」という表題のもとご講演いただいた。

加藤教授によれば、米國プロテスタントイイズムにおいて、シオニズムの担い手は、一九六七年の六日間戦争を境に主流派から福音派へとシフトした。主流派のシオニストはイスラエル支持者の代表は、著名な自由主義神学者、ラインホルド・

ニーバーである。ニーバーは、熱心なイスラエル支持者だったが、あくまでもプラグマティズム、リアリズムの立場に立つことから、「パレスチナの地は神に与えられた」といった宗教的な理由は認めなかった。ニーバーのイスラエル支持の理由は、ホロコーストに対するキリスト教の責任にある。ユダヤ人虐殺に加担したことへの反省として、ユダヤ人国家の設立を支援しなければならぬと彼は考えていたそうだ。

加藤教授は、この考えにはニーバーがドイツ系移民の子であることも影響していると推測する。ニーバー以外の主流派のシオニストには、宗教間対話の視点に立つ者や共産主義に対抗するユダヤ・キリスト教陣営という見方に立脚する者もいたと言う。

しかし、こうした主流派のイスラエル支持者たちの多くは、六日間戦争でのイスラエルの



蛮行に衝撃を受け、批判へと転じていった。これと入れ替わるような形で、元々イスラエルに関心が薄く、反ユダヤ主義的でさえあった福音派が、シオニズムに傾倒していく。初期は、パレスチナ旅行を契機に、イスラエルによるパレスチナ占拠の意義を、福音派に広く教育する必要性を感じたダグラス・ヤングが熱心に活動したそうだ。一九八〇年代になると、現在のイスラエルの首相ネタニヤフも属するリクード党と様々な福音派の牧師が親しく協力するようになる。福音派内にもシオニズムに賛同しない人物はいて、特に最近若者のパレスチナへの共感が高まっているが、基本的には福音派とイスラエルの蜜月が続いているとのことだった。

福音派がシオニズムを支持していない時期があったという事実は、何より両者を切り離しうる可能性を示すものだ。歴史的経緯についての理解が深まったことで、質疑ではより詳細に踏み込むこともでき、今後の研究のために極めて有意義な学びの機会となった。（報告者 主任研究員 柳澤田実）

## ■ 研究プロジェクト

## キリスト教主義教育の可能性と実践

Well-beingを共に生きるために

## 【公開研究会報告】

## キリスト教社会福祉施設における取り組み

— 社会福祉法人日本コイノニア福祉会の事例から

講師：社会福祉法人日本コイノニア福祉会 理事長・チャプレン

日本基督教団 久宝教会 牧師

牛田 匡氏

二〇二五年七月四日（金）  
 一時から一二時四〇分にかけて、講師に牛田匡氏を迎えて公開研究会を開催しました。牛田氏は日本基督教団久宝教会の牧師であり、社会福祉法人日本コイノニア福祉会の理事長およびチャプレンとしての働きも担っております。この公開研究会では、「ポストコロナアル神学」の立場から、すなわち、自己の経験を省察する視点から個人史が語られ、自身の個人史を語るとともに、キリスト教に対する親近感や違和感などについて分析的に述べられました。その後、現在の日本コイノニア福祉会における「キリスト教福祉」の取

り組みについて、理念と実践に焦点を当てながら、写真や動画を交えて紹介されました。この研究会には保育に関心を持つ学生たちも参加し、とくに実践面や理念に関する質疑応答がなされました。以下に、講師による内容の概略を記載します。

保育や幼児教育、女子教育などが、まだ社会制度として確立していなかった時代から、キリスト教保育や教育は、それらのニーズに応えるために、全国展開されてきた。それらは同時に教勢拡大志向の教授型伝道モデルでもあった。しかし、日本のクリスチャン率は一%のまま増えることはな

く、キリスト教保育の園におけるクリスチャン職員の率も下がり続けた。そのような時代の流れのなかで一九八〇年代、キリスト教保育連盟の「保育指針」は、従来の「子どもたちをキリストへ」から、「子どもたちと共にキリストへ」と変化した。それらの変化は消極的な変化として理解されるべきではなく、むしろ「神の宣教 (Missio Dei)」という宣教のパラダイムシフトと軌を一にするものであり、上から下への「教授型伝道モデル」から水平方向の「共生型宣教モデル」への変化でもあった。

今から六〇年ほど前に教会における奉仕活動として始められた日本コイノニア福祉会



の働きも、当初は「伝道と奉仕（福祉）」が両輪のようにして語られていたものの、社会福祉法人化してから半世紀を迎える間に、大阪府と京都府の二府五市にまたがって、七つの保育園と三つの高齢者介護事業所を運営するようになり、利用者も職員も特にキリスト教を求めているというわけではない人たちが大多数となっている。そのような現状の中で、改めて導き出された同法人の「キリスト教福祉」とは、伝道（クリスチャンにすること）を目的とするものでもなく、クリスチャンによるものでもなく、「隣人を自分のように愛しなさい」「人にしてもらいたいと思うことを、あなたがたも人にしなさい」というイエス・キリストの心（価値観）をもって、それぞれの地域で保育や介護等のサービスを必要とされている方々に寄り添い、そのニーズに応えることである。

そのように考えるに至った背景には、第二バチカン公会議以降の「宗教間交流」（インターフェイス、宗教多元主義）や、「Option for the Poor」（貧しい者の優先的選択／申命記七・七）の精神に基づく解放の諸神学がある。福祉を必要

とされている方々は、生活上の様々な課題を抱えておられるため、ある意味では「社会的に小さくされた存在」であると言える。彼らは他でもない歴史のイエスが共に歩まれ、インマヌエルが宣言（具現）された方々であった。福祉の現場には、多様な文化的背景、宗教的背景を持った方々がおられる。また乳幼児や、障がい者、高齢で身体が動かしにくく認知症になられた方々なども多くおられる。そのような方々に対してキリスト教への理解や信仰を目的的に求めるのではなく、そのように小さくされている人たちの命（人権・尊厳）を守るこそが、「命の源である神の創造の業への賛美」に他ならない。

「私を求めなかつた者に私は尋ね出され、私を探さなかつた者に見い出された」（イザヤ六五・一）という預言通り、福音は宗教を超え、宗教を求めているわけではない人たちの間にもインマヌエルの神は実在して共に働かれる。そのことを証しし続けていくことが、「箔」ではない「核」としてのキリスト教主義の福祉の取り組みである。

（報告者センター長 梶原直美）

## RCC主催講演会

## 当事者研究の誕生

—これからのソーシャルワーク実践の新たな地平

講師：ソーシャルワーカー、浦河へてるの家庭理事長、  
北海道医療大学看護福祉学部福祉マネジメント  
学科特任教授、先端研究推進センター兼任研究員

向谷地 生良氏

二〇二六年一月一日（木）  
一三時二〇分から一五時まで、  
向谷地生良氏を講師として講演会を開催しました。向谷地氏は一九七八年に北星学園大学文学部社会福祉学科を卒業後、北海道日高にある浦河赤十字病院にソーシャルワーカーとして勤務し、その過程で精神障害を抱える当事者と出会い、彼らと教会の一室で共に生活する実践を開始しました。この経験が契機となり、一九八四年には当事者と共に「浦河へてるの家」を設立するに至りました。

二〇二〇一年には「当事者研究」と名付けられた実践的アプローチが生まれ、向谷地氏は現在、浦河へてるの家の理事長を務めながら、北海道医療大学名誉教授として教育・研究に携わっています。本講演では、ご自身の来歴を交えながら、ソーシャルワーク（以下、「SW」と略）の視点から当事者研究について語られました。以下に、その要点を整理します。

まず、当事者研究における「当事者」とは、単に個人として存在する主体ではなく、社会的関係性や歴史的な脈絡の中で責任を担って生きる存在を指します。人は生物学的にだけなく、制度や政治、他者からの支えによって「生かされて」おり、その意味で世界の一部を構成する当事者です。自らがどのような背景のもとに生き、何に影響を受け、他者や社会にどのような影響を及ぼしているのかを自覚することが、当事者研究の出発点となります。

向谷地氏は、中学生の時に教師から暴力を受ける体験を

しました。その体験は、世界に潜む不条理と、それを生み出す人間の在り方への問いを呼び起こすと同時に、それを受け止める自己の発見につながりました。またそれは、社会的な紛争や時代の空気の中で自分に立っているという感覚を初めて獲得した出来事でもあり、後の当事者研究へとつながる感性の萌芽でもありました。

その後、社会の中で困難を強いられている人々への関心を深め、自らをそうした人々の側に置く実践を重ねてきました。学生時代には難病患者運動に関わり、特別養護老人ホームで住み込みの夜勤をしながら大学に通いましたが、その現場で「自分がいざれ働くとはどういうことか」を絶えず自問していたといいます。

大学を卒業後（二二歳）に精神科病棟に足を踏み入れた際、管理と服従を前提とする精神医療の構造に強い衝撃を受けました。人の幸福のために訓練されたはずの専門家たちが、なぜこのような構造を生み出してしまふのか。精神を病む人々の困難以上に、医療そのものが抱える構造的な「病」が、向谷地氏の大きな関心事となりました。自身もまた、精神科



病院の薄暗さや閉塞感、そこに響く声に触れたとき、心に「ざわつき」を覚えたこと懐かしく思います。その反応に落胆しつつも、同時に落胆できる自分には安堵した経験が語られました。「当事者研究」という名称が生まれたのは二〇〇一年です

が、その実践はそれ以前に遡ります。仕事を始めた当初、向谷地氏は理不尽な訴えを繰り返す患者に対して強い怒りを覚え、その自身の感情に驚愕しました。この経験を通して、精神医療の現場では支援者自身が怒りや無力感を抱え、それが管理構造や隔離への依存へとつながっていくことを直観しました。怒りを感じる自

己を観察することは、支援者の内面に潜む葛藤を理解する重要な契機となりました。

その後、英国で生まれたセツルメント運動と、当事者との起業という着想が生まれ、アルコール依存症者や統合失調症などを抱える回復者クラブの有志と、援助と被援助という関係を超えて「共に暮らす」実践を試みました。北海道には、戦前に朝鮮半島から動員された労働者が多く残り、アイヌの人々と家庭を築いて厳しい生活を送る中で、アルコール依存に陥る人々が少くありませんでした。向谷地氏は彼らと生活しながら、援助ではなく「共に生きる」ことを目指しました。しかし、この試みは医師の反発を招き、精神医療のチームから外され、事務職への異動を命じられました。

この行き詰まりの中で、向谷地氏はむしろ「自分のクライエント性」に着目し、積極的に自らをSW実践の対象者として捉えることを意図した実践を着想しました。それを機に、医療機関の中にSWの理念と実践を実装することの難しさと、人が居場所を失い精神を病むプロセスに伴走する社会実験としての試みが始

まりました。そして、自身の内にある複数の声との対話を通して、この経験を研究へと転換していきました。

特に一九九五年以降、新たなメディアの登場 (PowerPoint) を背景に、膨大な文献や写真、気づきを現在で七千枚を超えるスライドとして蓄積し、歴史や世界の研究者と文献を介して対話を重ねながら、自らの立ち位置を確認してきました。この蓄積は、後に当事者研究の理論化に大きく寄与することとなります。

当事者研究の核心は、困難を抱える本人が「自分に何が起きているのか」を語り、その語りから理論を構築する一人称研究にあります。従来の三人称研究では捉えきれなかった生のリアリティを、当事者自身の言葉から明らかにする点に特徴があります。二〇一三年には認知科学学会においても一人称研究が重要なテーマとして位置づけられ、学術的関心が高まったことが紹介されました。

当事者研究の原点には「遊び心」があります。この実践は子どもたちの間にも広がっており、他者との衝突や葛藤を通して、自分とは異なる考えを持つ相手と出会い直す力を育んでいます。大人が用

意した答えを理解することよりも、子ども自身が自らの言葉で語るプロセスこそが重要であり、その過程そのものが気づきと成長を生み出します。

向谷地氏は刑務所にも足を運び、社会の中で居場所を失った人々から学び続けています。そこでは、当事者の脆弱性や問題以上に、私たち自身の課題が浮上ります。困難な経験を生きる人々の知を社会が学び、循環させることで、より生きやすい社会が生まれるのです。

当事者研究は二〇〇四年、上野千鶴子氏の招きにより東京大学で紹介され、二〇一五年には同大学に研究拠点が設立されました。精神科病院への入院を繰り返す当事者も研究者として参画し、現在は世界の研究者から注目を集め、国際的な広がりを見せています。

当事者研究は、困難を生き抜く人々を支援の対象としてではなく、社会の知恵の源として捉え直す発想であり、SWが掲げてきた理念とも深く響き合います。向谷地氏は、その思想的背景として、ハワード・ゴールドシュタインの認知ヒューマニスティック・アプローチとの共鳴を指摘しました。困難な経験を生き抜く人々が尊重され、その経験から社会が学び、共有していくという

当事者研究の方向性は、SWが目指してきた理念と軌を一にするものです。

以上の講演内容は、専門職に限らず誰もが、世界の中で他者と共に生きるとはいかなることかを、改めて熟考する機会となりました。鉄格子の外側に安住するのではなく、それを解決方法とする自らの内

## ■ キリスト教と文化シリーズ (2) アダムの懺悔

過ちを犯した者は悔い改めるべきではないだろうか。

一三八三年にドイツで書かれた装飾写本『世界史』の三枚目の表には、裸の姿で水の中に立ち、両手で顔を覆う男の挿絵がある。波の様子から、そこは川であることが分かる。

なる声に気づくこと、そして、この世界での居場所を分かち合う存在として、自己と他者に自由に言葉を語らせることの重要性を学びました。世界が当事者研究に関心を寄せる現在、その可能性と希望に深く共感する、きわめて豊かで貴重な時間でした。

(報告者 センター長 梶原直美)

り、一羽の兎と狐一匹だけが目を丸くしてそれを見ているのだ。

中世ヨーロッパの様々の『世界史』には、天地創造から書物が執筆された時代までの歴史が書かれているが、最初の三千年の記述が聖書に基づいている。しかし聖書には、川の中に立つて悔い改めている人の話はないし、エデンの園から追放されたアダムのいるエバが、反省したかも書かれていない。

男は、三匹の魚、三羽の鳥、そして三つの陸の動物に囲まれている。鳥と野獣はほぼ全て彼の方を向き、見守っている。三匹の魚は、直立して泳いでおり、わずかに曲がった男の脚を支えているようだ。男は四十日間ちかくも断食を続けてきたので、足が弱って

支えを必要としているようだ。顔を覆う両手は、彼が悔い改めていることを示しており、犯した罪の重さが窺える。この男はアダムの。因みに、三枚目の裏には、同じくエバが別の川に立っている挿絵がある。彼女は再びサタンの誘惑を受けてお

聖書にはないが、紀元後一世紀、あるいは二世紀に、ユダヤ教徒によって執筆された『アダムとエバの生涯』にそのように書いてある。キリスト教徒もやはり、悔い改めることは避けられないと考え、その伝説を受け継いだようだ。

(報告者 主任研究員

Andreas Rusterholz)



『世界史 (Weltchronik)』 Codic. bibl. fol. 5, 3r, Trier, 1383  
http://digital.wlb-stuttgart.de/purl/bsz366779044  
(Public Domain Mark 1.0)